



令和5年度
「孤独・孤立対策活動基盤整備モデル調査」
～アートによる社会包摂を通じた「福祉を超えた」協働モデルの構築～
最終報告書（概要版）

認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ

2024年3月5日

1. モデル事業の概要

本事業の背景

- 孤独・孤立対策は多くのNPOによって担われてきているが、多くは顕在化した課題への対処が中心であり、予防的対応は未だ十分とは言えない。また、顕在化した課題への対処は福祉的・相談支援的要素を強く持つが、福祉領域を超えた地域の諸アクターのつながりが弱く「福祉を超えられていない」場合が少なくない。
- 孤独・孤立がすべての国民・住民にとって無縁ではなくなっている現在、孤独・孤立対策が「福祉を超える」枠組みを提示できるかが問われており、その枠組みを構築するためには、福祉領域以外の地域の諸アクターの協働基盤の強化が必要である。

本事業の目的

- 孤独・孤立対策に取り組む団体（以下、実行団体）が、地域の多様な主体と連携し、孤独・孤立の日常生活領域における予防に資する「福祉を超えた」協働関係及び取組のモデルを構築すること。
- むすびえが実行団体によるモデル構築のプロセスに伴走支援を行うことで、実行団体の運営基盤を強化すること。

本事業の概要

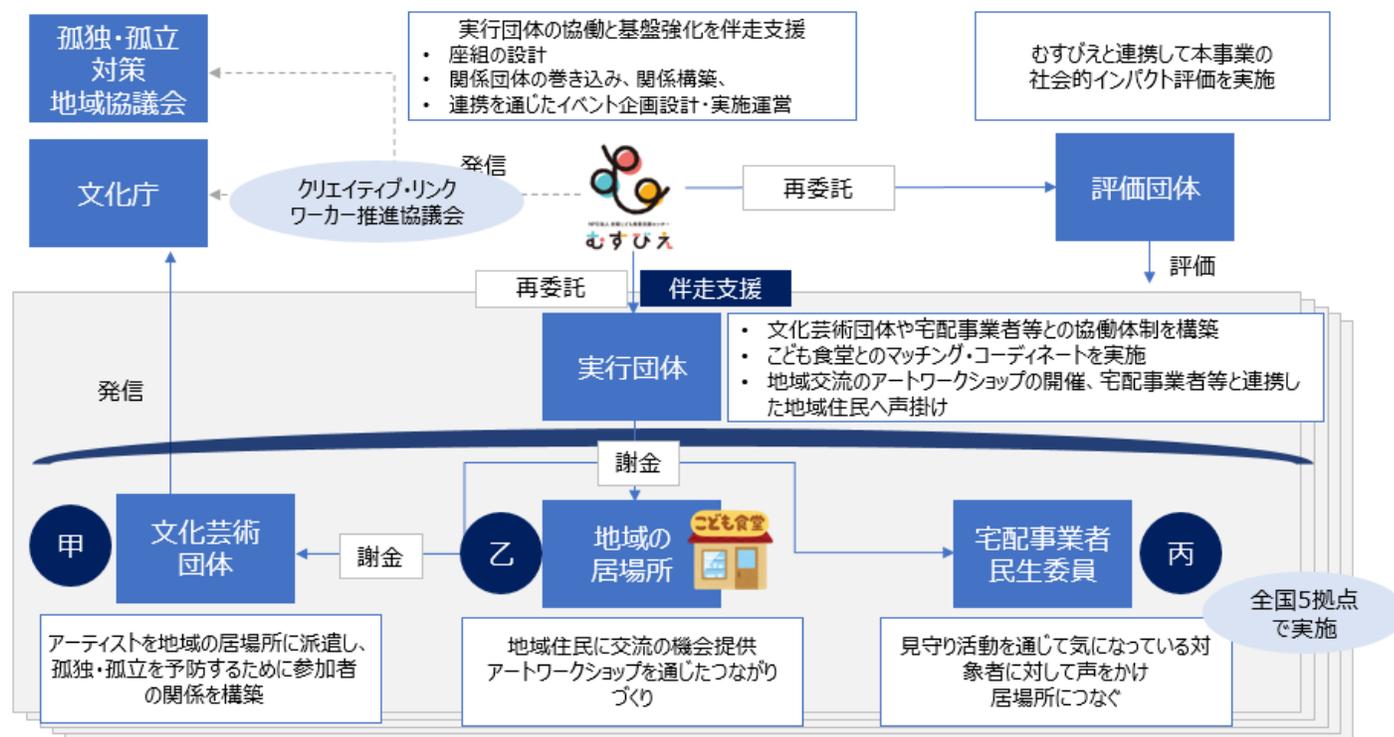
- 本事業では、孤独・孤立の日常環境領域における予防に資する「福祉を超えた」協働モデルを立ち上げる取組として、実行団体が地域の多様なアクターと連携し、地域の居場所において、「アートによる社会包摂」を目的とした文化芸術ワークショップを開催する。
 - * 本事業におけるワークショップは、鑑賞を目的としたイベントではなく、アートを通じて人と人とのつながりを創出したり調整したりする「アートによる社会包摂」（文化庁基本方針より）を目的とした場とする。
- 実行団体による協働の座組の立ち上げと取組の企画・実施の一連のプロセスに伴走し、実行団体の運営基盤強化を図る。

1. モデル事業の概要

本事業の全体像

活動

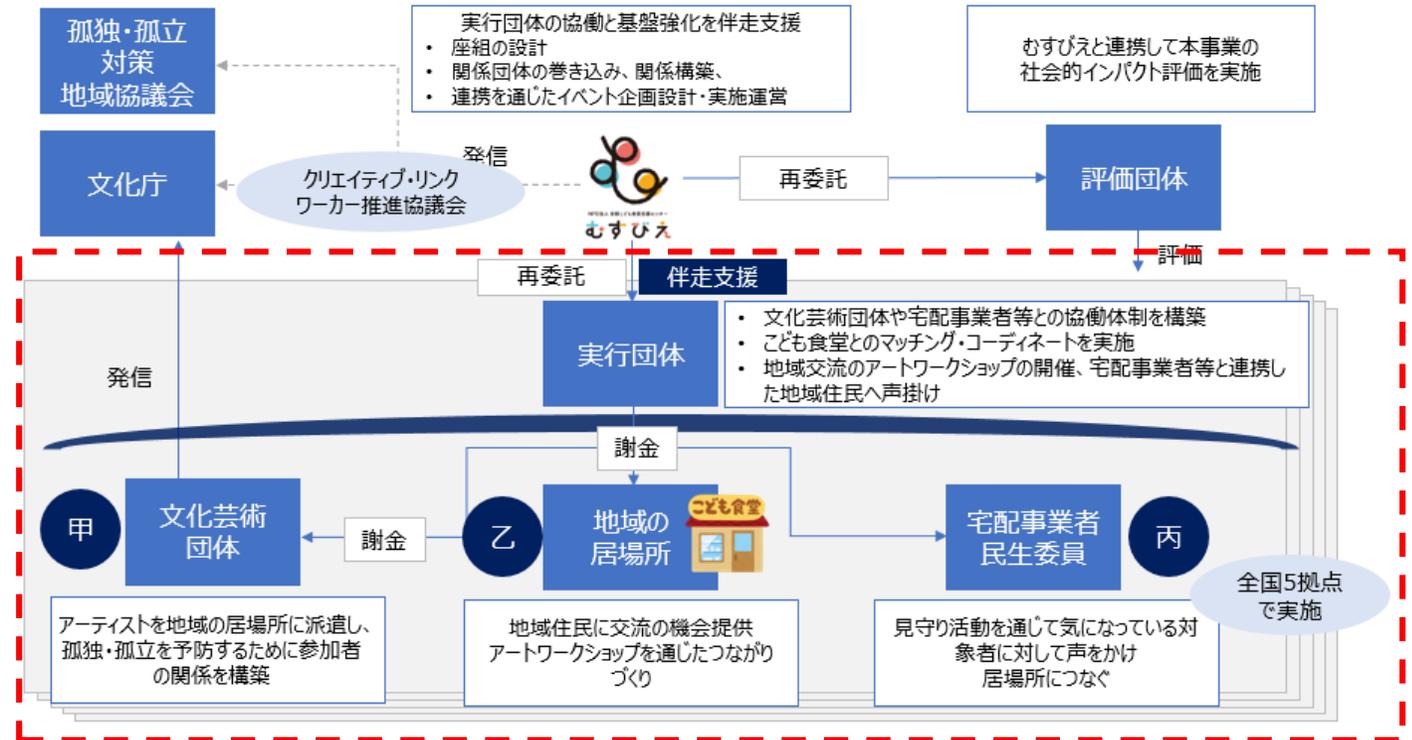
- ①協働の座組の立ち上げ（5拠点）
実行団体と連携し、協働の座組を立ち上げる
- ②取組の企画・開催
協働のモデルを立ち上げるための取組として、実行団体が地域の多様なアクターと連携し文化芸術ワークショップを企画・運営する
- ③実行団体への伴走支援
座組と協働関係の構築、取組の企画・実施等の一連のプロセスに対して伴走支援を行い、実行団体の運営基盤強化を図る
- ④効果測定の実施
取組の孤独・孤立への予防に対する効果を検証する（評価機関による調査）
- ⑤全国展開に向けた事業構想の検討
本事業の取組を礎に令和6年度以降の全国展開を見据えた事業構想を検討する



2. 取組の概要

取組の概要

主体	役割
実行団体	<ul style="list-style-type: none"> 実行団体が拠点とする地域において、文化芸術団体（甲）・地域の居場所（乙）・孤独・孤立状態にある人とつながりのある団体・機関（丙）をつなげ、協働関係を構築する。 甲・乙・丙と連携し、文化芸術ワークショップを企画し、地域住民に声掛けを行い、地域に開く形でワークショップを開催する。
文化芸術団体（甲）	<ul style="list-style-type: none"> アーティストの選定・コーディネーションを行い、地域の居場所（乙）への派遣を行う。 文化芸術ワークショップの企画・開催を行う。
子ども食堂を含む地域の居場所（乙）	<ul style="list-style-type: none"> 地域住民に交流の機会を提供し、文化芸術ワークショップを通じたつながりづくりを行う
孤独・孤立状態にある人とつながりのある団体・機関（丙）	<ul style="list-style-type: none"> 見守り活動を通じて気になっている住民に対して声をかけ、地域の居場所（乙）につなぐ。



2. 取組の概要

取組の狙いと期待成果

- 取組を通じて、地域の人々に他者につながる機会を提供し、孤独・孤立を事前に予防する地域づくりを行う
- 地域の事業者や民生委員と連携して地域住民に声掛けを行い、居場所につなげ、孤独・孤立状態の事後的対処を行う機会ともすることを旨とする

①取組を通じた孤独・孤立の予防

- ワークショップへの参加を通じて、居場所の参加者間でのつながりの創出や関係性の調整がなされ、孤独・孤立が予防される
- ワークショップがきっかけとなり、孤独・孤立に陥るリスクのある人やこれまで地域の居場所に接点のなかった人が居場所に参加するきっかけが生まれる／参加する、その結果、居場所を通じて地域住民間のつながりが増える

②実行団体の基盤強化

- 地域の居場所・文化芸術団体・事業者／民生委員等との連携を通じて地域内に新たなネットワークが形成され、強化される
- 実行団体の運営力・運営基盤が強化される

③地域における孤独・孤立対策の機運醸成と体制構築

- 当該地域における孤独・孤立対策への機運醸成と、地域の居場所・文化芸術団体・地域の事業者等、多様な主体による協働体制及び取組の推進体制が構築される
- 福祉を越えた孤独・孤立対策の枠組みが提示され、福祉領域以外のアクター間での当該課題の認識や関心が高まる

3. モデル事業の成果（アウトプット）

アウトプット	指標
1) 協働の座組が立ち上がる	<ul style="list-style-type: none"> ・座組の数（5拠点） ・各拠点における新規協働団体の数と体制
2) 文化芸術ワークショップの開催	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップの開催回数（最低3回×5拠点） ・ワークショップの参加人数

- ・ 公募により以下5団体を実行団体として採択。各団体が拠点とする宮城県、埼玉県、岐阜県、兵庫県、福岡県の5県を対象に事業を実施。
- ・ 各拠点において協働の座組が立ち上げられた。各拠点の座組の特色は以下のとおり。

団体名	団体概要	拠点地域	特色
特定非営利活動法人ふうどばんく東北AGAIN	地域の居場所を支援する中間支援団体	宮城県	実行団体が地域の居場所（乙）を兼務
一般社団法人埼玉県子ども食堂ネットワーク	地域の居場所を支援する中間支援団体	埼玉県	複数の地域の居場所（乙）が連携して広域で座組を組んだ例
公益財団法人可児市文化芸術振興財団	文化芸術団体	岐阜県	実行団体が文化芸術団体（甲）を兼務
認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸	地域の居場所を支援する中間支援団体	兵庫県	実行団体・甲・乙をそれぞれ異なる団体が担った例
NPO法人ドネルモ	文化芸術団体	福岡県	実行団体が文化芸術団体（甲）を兼務

3. モデル事業の成果（アウトプット）

アウトプット	指標
1) 協働の座組が立ち上がる	<ul style="list-style-type: none"> ・座組の数（5拠点） ・各拠点における新規協働団体の数と体制
2) 文化芸術ワークショップの開催	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップの開催回数（最低3回×5拠点） ・ワークショップの参加人数

- ・ 各拠点における取組として、地域の居場所における社会包摂を目的とした文化芸術ワークショップを実施した。
- ・ 文化芸術ワークショップの対象層、規模、取り扱う文化芸術のジャンルの判断は実行団体に委ねる形としたため、以下のとおり様々であった。

拠点	宮城県	埼玉県	岐阜県	兵庫県	福岡県
開催場所	フードパントリー会場	地域の公共施設	こども食堂	こどもの居場所	こども食堂
対象者層	ひとり親家庭支援対象者 （宮城県全域）	こども食堂参加者 （広域）	こども食堂参加者 不登校児とその保護者	孤独・孤立リスクのあるこども、青少年、高齢者、外国人等	こども食堂参加者 不登校児とその保護者
規模	100世帯300名	40-50名程度	30-40名程度	10名	20-30名程度
ジャンル	多様なジャンル	ミュージカル	音楽	音楽、絵画、演劇	絵画、演劇

3. モデル事業の成果（ワークショップの様子）

宮城県	埼玉県	岐阜県
		
<p><参加者の反応></p> <ul style="list-style-type: none">• ひとりではないと感じることができた。• 同じひとり親の方とつながることができ、気持ちが楽になった。 <p><運営者の反応></p> <ul style="list-style-type: none">• これまでほとんどドライブスルーで実施していたので、話す機会はあまりなかった。今回は運営者が参加者と直接会話でき、参加者同士の会話も多く生まれていた。	<p><参加者の反応></p> <ul style="list-style-type: none">• こどもがのびのび遊べる環境や初めての人に対しても物おじせず関われる環境だった。普段体験できないことへの挑戦の機会になった。 <p><運営者の反応></p> <ul style="list-style-type: none">• 関わって頂いた方々からも、ご協力を頂いた方からも、取り組んで良かったと大絶賛を頂いた。	<p><参加者の反応></p> <ul style="list-style-type: none">• こどもたちが初めてさわる楽器にすごく興味を持っていた。• 音楽なので難しさがなく、大人もこどもも参加できたことがよかった。 <p><運営者の反応></p> <ul style="list-style-type: none">• 3回続けて実施したことで一体感が生まれた。食べることと音楽が媒介となり参加者がより一層参加しやすい場になった。

3. モデル事業の成果（ワークショップの様子）

兵庫県



<参加者の反応>

- 他者との接点が久しぶりで新鮮だった。
- みんなでひとつの絵を描くことがとにかく楽しかった。

<運営者の反応>

- イベント開始時にはそれぞれ距離感があったが、音楽・絵画・演劇を共演することにより、その距離感は短期間で縮まることを実感した。特に演劇ではそれぞれの個性を把握し、関係性ができていた。

福岡県



<参加者の反応>

- なかなか自宅ではできない体験をさせてもらった。こどもがこんなに絵を描くことに集中できるとは思わなかったため、こどもの新たな一面が見れた。

<運営者の反応>

- こどもたちにプロのアーティストとの特別な体験を届けることができた。アートは参加者同士の会話や新規参加者の参加のきっかけになると感じた。

3. モデル事業の成果（アウトカム）

アウトカム	指標
①取り組みを通じた孤独・孤立の予防	
地域住民同士のつながりが増える	地域内の知り合いの数の変化
居場所への愛着度が上がる	居場所の愛着度合いの変化
参加者の数が増える	参加者の数、今後の参加意向
居場所が地域に一層開かれる	新規参加者数、世代や属性の広がり
参加者の行動にポジティブな変化が起こる	笑顔を見せる/感謝を伝える/参加者同士で会話をする人の数や割合の変化
②実行団体の基盤強化	
ネットワークが強化される	地域内での新たな協業団体の数
運営力・運営基盤が強化される	協働構築に向けた調整力、企画・運営力の強化
③孤独・孤立対策の機運醸成と体制構築	
実行団体の孤独・孤立に対する認識の変化	当該課題解決への貢献可能性に対する認識の変化、当該課題に取り組む意向、課題/ニーズ
協業団体の孤独・孤立に対する認識の変化	同上
協働が継続する または 新たな協働が立ち上がる	協働の座組数、協働継続に対する意向、課題/ニーズ

また、本事業の実施を通じて以下が明らかになることが想定される。

- 実行団体が「福祉を超えた」協働モデルの立ち上げ及び円滑な実施を行う上での成功要因
- 実行団体が協働を通じて円滑に取り組む（社会包摂を目的とした文化芸術ワークショップ）を行う上での成功要因
- 協働モデルの継続における課題及びニーズ
- 協働モデルの横展開の可能性と課題



3. モデル事業の成果（アウトカム① 取組を通じた孤独・孤立の予防）

狙い

- ワークショップへの参加を通じて、居場所の参加者間でのつながりの創出や関係性の調整がなされ、孤独・孤立が予防される。
- ワークショップがきっかけとなり、孤独・孤立に陥るリスクのある人やこれまで地域の居場所に接点のなかった人が居場所に参加するきっかけが生まれる。その結果、居場所を通じて地域住民間につながりが増える。

定量 評価

- 効果測定（参加者及び運営者へのアンケート調査と現地調査）の結果、今回の取組は地域住民同士の会話やつながりの増加、参加者の居場所への愛着度の向上に寄与することがうかがえ、将来的に孤独・孤立の予防への効果の発現が期待できることがわかった。
- アンケート調査の結果は以下のとおり（ワークショップ計15回、参加者234名分のアンケート回答に基づく（アンケート回収率38.6%））。
 - ワークショップ参加者の43%が地域内の知り合いが増えたと回答
 - 今回拠点となった地域の居場所へ複数回参加経験のある参加者のうち、66%がワークショップがあることで他の参加者との会話が増えたと回答
 - ワークショップの参加前後で参加者の79%が地域の居場所が好きになったと回答、愛着度の変化の理由はどの拠点においても「ワークショップが楽しかったから」という回答が6-7割と最も高かった
 - 地域の居場所への今後の参加意向について、参加者の約9割が今後も参加したいと回答。その理由はどの拠点においても「ワークショップが楽しかったから」という回答が7-8割と最も高かった

定性 評価

- 参加者からは以下の反応があった。
 - ワークショップがあることで年配の方を含め新しい参加者が増えた印象。初めて会う人とも、いつもの参加者で顔見知りではあるものの話したことがない人とも会話することができた。
 - ワークショップがあることも食堂とないことも食堂を比較すると、あることでゆとり時間を過ごすことができ、初めて会う人を含め色々な参加者との会話が増え、親同士で子育てに関する話などもできた。
- 岐阜県ではワークショップがきっかけで母子寡婦会からひとり親家庭の方が6組参加し、社協担当者との接点づくりや不登校支援・相談支援につなげることができた例もあった。

3. モデル事業の成果（アウトカム① 取組を通じた孤独・孤立の予防）

【孤独・孤立の予防に有効な文化芸術ワークショップの特徴】

- 現地調査を通じて、文化芸術ワークショップの内容によって地域住民同士の会話やつながりの増加に違いが出る可能性が示唆された。具体的には、ワークショップの中で参加者同士の交流や協働が含まれる形式と参加者が個人（または家族単位）で体験する形式では、前者の方がより参加者同士の交流を通じたつながりの醸成に寄与すると考えられる。
- 今回の実践例から、住民同士のつながりの増加を意図したワークショップの設計において協働団体同士が共通認識を築くべき大事な点として以下が挙げられる。また、これらを実際にワークショップを行うアーティストに対しても適切に伝達し、関係者全員が共通認識を共有していることが重要と考えられる。

- ①文化芸術ワークショップの目的
- ②ワークショップの対象（誰にとって）と理想とする場のイメージ（どのような場とするか）
- ③②のようなワークショップを設計する上で大事にしたい要素

- 今回のワークショップの目的は文化芸術を通じた社会包摂にあったが、こどもの体験格差の解消というニーズも参加者や居場所運営者にはあり、地域の居場所という暮らしの身近な圏域において家庭では得られない文化芸術体験の機会に期待があった。「文化芸術ワークショップ」は目的設定と内容によって意味合いも効果も異なる。現場のニーズを汲み取りながら、適切な目的設定と内容の設計を行うことが、社会包摂/孤独・孤立対策に効果的な文化芸術ワークショップを設計・実施する上で重要であると考えられる。

【団体による効果の受け取り方の違い】

- 今回のワークショップが孤独・孤立の予防への効果が期待されることは確認できた一方、その効果の意味合いや受け取り方は拠点となる地域の居場所の活動目的や運営方針によって異なることが示唆された。
 - （多世代）交流に重きを置いた居場所において、今回の取組は当該居場所のビジョンや目的達成を後押しする施策として受け取られた
 - 課題を抱えたこども/家庭を支援につなげるセーフティネット機能に重きを置いた居場所においては、今回の取組が運営者と参加者との接点が減るため、団体の目的に対する親和性は高くないと取れるフィードバックがあった
- 拠点となる団体/居場所の目的・考え方等によって効果の捉え方や取組の意味合いが異なると考えられるため、今後、全国への横展開を図る際にはこの点に留意する必要がある。

4. モデル事業の成果（アウトカム② 実行団体の基盤強化）

評価の 観点

- a) 財政基盤の強化や人材育成を通じた組織力の強化等、「団体固有の基盤強化」
- b) 協働を通じた外部リソースの活用も含めたヒト・モノ・カネの充実による「協働型の基盤強化」

- 拠点ごとに座組の特徴や団体間の役割分担と連携の進め方が異なることから、基盤強化の効果の発現及び実感も拠点や団体によって様々だった。本事業の実施団体の基盤強化に対する効果とその成功要因を形式知化することは難しいが、効果が確認された事例を以下に示す。

- a
- 実行団体の団体固有の基盤強化の事例
 - 組織としての事業企画・推進ノウハウの獲得
 - 団体職員の事業推進力の向上
 - 更なる事業展開につながる実績と学びの獲得
 - 文化芸術団体（甲）と地域の居場所（乙）の基盤強化の事例
 - 事業推進ノウハウ獲得による人材育成と組織内での波及
 - 自団体の強み・弱みの再認識
 - トップダウン的運営から自発性を重視した運営への変化
 - 協働型の事業により責任と権限を果たし合いながら共に事業を進める中で、他団体の組織文化や異なる事業運営の在り方に深く触れたことで様々な学びや刺激につながったことがうかがえる。

- b
- 兵庫県の例から、本事業は協働型の基盤強化の観点においても効果があったこと、またネットワーク強化が基盤の強化における重要なファクターとなることがわかった。

実行 団体	中間支援組織の役割と機能発揮において、地域のシーズ（社会資源）とニーズの知識とネットワークが重要。法人としてシーズ側のネットワークが強化された。
甲	地域に入り社会包摂に関わる取組を行うという目標を、財団にはない機能/強みを持った団体と組むことで実現でき、実績がつくれた。
乙	他団体と協働し互いの強み弱みやリソースを補完し合うことで、自団体だけでは難しい事業や取組を起こせることがわかった。

4. モデル事業の成果（アウトカム③ 孤独・孤立対策の機運醸成と体制構築）

評価の 観点

- a) 実行団体及び協働団体の孤独・孤立課題と対策に対する認識の変化
- b) 協働の継続または新たな協働が立ち上がる

a

- 本事業を通じて、複数の座組において孤独・孤立の課題や当該課題の解決に対して自団体/今回の取組ができることを議論し捉え直す機会が生じた。
- これらの事例から得た示唆は以下のとおり。
 - 孤独・孤立という言葉には、深刻な状況を想起させる強さがあること、日常生活領域における予防の文脈が想像しづらく、自分とは距離の遠いものであると感じさせる傾向があること
 - 多様な主体が孤独・孤立対策に参画しやすい機運を醸成するためには、孤独・孤立課題が誰しもにとって陥る可能性のある身近な課題であること、日常生活領域における予防も重要であること、孤独・孤立対策を目的としていなくとも普段から行っている地域活動等がその予防策としての機能を有するものであること、などを広く発信し、人々の課題認識を変え、参画のハードルを下げるのが重要
 - そのために、誰にとってもわかりやすく受け入れやすい形で上記を伝える力が当該課題の対策を進める行政・自治体・中間支援団体等には求められる

埼玉県	孤独・孤立対策への手詰まり感 ⇒ 当該課題の捉え方とそれに対することも食堂の在り方（包摂的アプローチ）を再定義。納得感が醸成され気が楽になった。
兵庫県	実行団体・協働先が当該課題のハードルの高さから躊躇いや不安を感じていた ⇒ 当該課題の捉え方を協議し、民間/地域にも・だからこそ担える役割（ゼロ次予防）を検討。当事者意識が芽生え心理的ハードルが下がった。

b

- 全ての実行団体が今回の取組の意義を実感し継続の意向を示している
- 兵庫県の実行団体においては、他団体との協働と地域のリソース（アーティスト）活用により、2024年度に神戸市内9区への展開を検討
- 一方、協業及び取組の継続と横展開の双方において、資金の確保が課題として挙げられる（5.（2）にて後述）



4. モデル事業の成果

モデル事業を進める上で明らかになった課題

(1) 協働先との事業目的や事業の推進における目線合わせ・コミュニケーションの難しさ

- いくつかの座組では、事業の目的や取組内容に対する目線合わせにおいて課題に直面した。
- 今回の5拠点における実践から明らかになった分野を超えた多様な主体の協働における成功要因は次項（3）のとおり。

(2) 孤独・孤立が気になる層へのアウトリーチの難しさ

- 地域の事業者や民生委員等（「丙」団体）の巻き込みにより「孤独・孤立が気になる人」への声掛けに意識的に取り組む中で、実践を通じて当該層に向けた広報・アウトリーチにおける以下のような難しさに直面した。
 - 「外に出ている元気な人」には情報を届けられるが、ひきこもりがちであり外に出ない人や地域と接点がない人に届けることが難しい
 - 「孤独・孤立」「つながり」という文言が逆に当該層への発信や声掛けの妨げになってしまう
- 上記の課題に対し、実行団体間の中間報告会の場において、以下の議論が交わされた。
 - 孤独・孤立対策を前面に打ち出すことで進む対策と、前面に打ち出さないからこそ進む対策がある。特に日常生活領域における予防においては、孤独・孤立をあえて打ち出さずに広く地域にアプローチしていく中で、参加者である「みんな」の中に孤独・孤立課題の当事者が包み込まれていくような包摂的なアプローチが有効である。
 - そのために社会環境を変えることが重要であり、本事業のように多様な主体が協働することで地域の様々な分野で活動する主体に対して孤独・孤立対策の視点を養っていくことが必要である。
- 一方、この課題に直面したことで、兵庫県と埼玉県の座組においては、前項のアウトカム③に示したような孤独・孤立の課題や自団体の取組/今回の協働の意義に対する認識の変化/再構築につながったことは、本事業の成果の一つと考えられる。



5. 他地域への横展開の可能性の検討

横展開する際のアドバイス

(1) 事業活性化要因：アートコーディネーターの巻き込み

- 「人と人とのつながりを創出したり関係性を調整したりする『アートによる社会包摂』を目的とした文化芸術ワークショップ」を行う上では、その取組の趣旨に合致した文化芸術体験を提供できるアーティストの選定及びアーティストとのコーディネーションが可能な組織または個人（以下、アートコーディネーター）の存在が重要である。
- 実行団体が取組の目的と狙いを深く理解していたこと、アートコーディネーターとしての機能を持った組織または個人を巻き込むことができたこと、実行団体によってアートコーディネーターとの目線合わせが適切に行われていたことが今回の成功要因として挙げられる。
- 但し、本事業に参画した文化芸術団体によると、アートによる社会包摂について十分な理解・知識・経験を持ったアートコーディネーターもアーティストも未だ多くはなく、担い手の育成が課題である。そのため今回の事業のような規模及びレベルでの座組の構築も取組も難易度が高く、そのままの形で全国展開することは難しいとの指摘があった。横展開においては、アートコーディネーターが介在して質の高いワークショップの設計やアーティスト選定・派遣を行うモデルの他、地域の居場所に社会包摂を目的とした文化芸術体験を提供できる地域のアーティストを活用した汎用性の高い簡易版のモデルの検討が必要と考えられる。

(2) 地域/テーマ側と文化芸術側の双方のコーディネーターの存在

- 上記に加え、以下の2つの側面から、地域やテーマ（孤独・孤立対策）の知識・経験・ネットワークを持ったコーディネーターの存在が重要と考えられる。
 - 取組の目的設定とその背景課題の共通認識の確立、及び、実践と学習を通じた知見の蓄積と取組内容の発展
 - 分野を超えた連携の浸透と機運の醸成

(3) 目的設定と役割分担

今回の5拠点における実践から、分野を超えた多様な主体の協働における成功要因として以下が明らかになった。

目的の共有	事業の背景、狙い、意図、協働の目的。取組を通じて何を目指し、その過程で何を大切にするか。
明確な役割分担	事業の全体像と各団体の役割・所掌範囲。グラウンドルール作成による安心安全の確保。
当事者意識の醸成	孤独・孤立の課題認識の共有を通じた当事者意識の醸成。協働への意欲・モチベーションの醸成。



5. 他地域への横展開の可能性の検討

阻害要因として想定されること

(1) 資金リソースの確保の難しさ

- 今回の取組について、参加者からの評価も高くすべての実行団体が継続の意欲を見せている一方、取組を継続・横展開するには資金確保が課題であるとの声が寄せられている。
- いずれの実行団体・甲・乙も普段から自力で資金調達を行っているものの、こども食堂をはじめとした地域の居場所の日常的な運営等、従来の活動を継続することに資金的・人的リソースに限界がある。今回のような取組を従来活動に加えて継続し、日常的に実施するためには資金的及び人的リソースの確保が課題であり、持続的な資金調達のスキームや機会を合わせて構築する必要がある。
- また、今回の取組のようなアートコーディネーターが介在して質の高いワークショップの設計やアーティスト選定・派遣を行うモデルの他、地域の居場所に社会包摂を目的とした文化芸術体験を提供できる地域のアーティストを活用する等、汎用性の高い簡易版のモデルの検討が必要。

(2) 地域の居場所への負担の大きさ

- 今回の取組はいずれの地域の居場所（乙）からも評価が高かった一方、関係者との調整や事前打ち合わせ、当日の運営等、負担が大きかったとの声が挙げられた。
- 兵庫県の座組のように、実行団体・甲・乙をそれぞれ異なる団体が担い、地域の中間支援団体が実行団体を担っていた場合、実行団体がハブになりながら全体のコーディネーションを行うことで乙への負担が抑えられていた可能性があるが、いくつかの座組においては乙に大きな負担が生じていたことがわかった。本事業に乙として関わった団体からは、少ない人数で運営しているこども食堂がこの規模及び内容の取組の受け皿になることは難しく、場所/環境と十分な人員が整っていることも食堂でないと難しいのではとのフィードバックがあった。
- また、環境と人員ともに整った団体であっても、一定程度の負荷がかかる取組であるため、経営層及び取組を推進する実務者の共感や意欲があることが重要であるとの見解が示された。
- 上記に鑑み、地域の居場所を支援する中間支援団体が参画することで乙への負担を軽減する等、座組における工夫を行うことも重要であると考えられる。